

# 上原 美術館 通信

No.  
**15**

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2021年10月1日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



本展は、長年にわたって伊豆の仏像の展示を行ってきた当館が、伊豆の仏像に加え、静岡市内の仏像をあわせて展示する初めての試みです。

静岡県は、東西を結ぶ東海道、太平洋岸と内陸の甲斐国(山梨県)を縦に結ぶ富士川街道など、無数の街道が縦横に走る本州の結節点です。静岡県中部・東部は古く駿河国と呼ばれ、現在の静岡市はその国府が置かれた特別な地でした。一方、県東端の伊豆は古来海上交通の要衝で、遠く離れた静岡市と伊豆は、陸路と海路の違いこそあれ、モノと人、文化が行き交う列島の十字路でした。

静岡市と伊豆を仏像から見ると、共通点があります。いずれも古い薬師如来像が多く、薬師如来を中尊とする群像が存在するのです。しかもその群像は、日光月光菩薩、十二神将といった一般的な薬師如来の眷属とは異なる尊格で構成されていることも似ています。そこで本展では、この共通点に焦点を合わせ、伊豆と静岡市内、それぞれの地域を代表する薬師如来像と薬師如来像を主尊とする群像のうち、魅

力的な仏像を厳選して展示いたします。

河津町谷津地区、南禅寺に伝来した多くの仏像は、伊豆最古の仏像群です(現在は河津平安の仏像展示館で展示)。南禅寺仏像群は、9世紀にさかのぼる薬師如来坐像を中心に、同じ9世紀の2体の天部像、やや時代が下る地藏菩薩像(写真①)、十一面観音像、梵天・帝釈天像など26体の平安仏から構成されています。従来、これらの像は在地仏師による地方色豊かな地方作とされ、数の多さから、かつて存在した多くの寺院の仏像が、一か所に集められたものと考えられてきました。しかし近年の再調査で、これらの仏像は造形的に優れ、用いられた用材から見ても正統な考え方に基づいて造像されたものとされ、むしろ中央作と考えられるようになりました。この群像が造像された時代、伊豆諸島周辺の火山活動が活発化し、朝廷を震撼させていました。本群像は、火山活動の鎮静化を願って中央の関与で造像されたものかもしれません。南禅寺における造像活動は9～10世紀に活発化した後、11世紀にやや落ち着きますが、これに呼応するよう

に伊豆諸島の火山活動は静穏期に入っていた可能性が高いようです。再び南禅寺で造像が盛んになる12世紀。この時期は再び伊豆諸島近海で火山活動が活発化した時期と重なります。この時期には神像(写真②)が多く造像されましたが、これらの像は噴火を起こす伊豆諸島の神々の姿なのかもしれません。

そのほか伊豆からは、月間神社(式内社である竹麻神社が改称)の本地仏であったと考えられる南伊豆町、青龍寺の薬師如来像、漂着伝説を持つ下田市、曹洞院薬師如来像と二天像、行基伝説に彩られた、松崎町岩科地区の岩科三薬師のうち2体、いずれも厳重な秘仏である指川地区と松尾不動堂の薬師如来坐像(写真③④)などを展示いたします。

静岡市の仏像としては、静岡市葵区、坂ノ上薬師堂の諸像と松野薬師堂(現在は阿弥陀堂に改称)の平安仏を展示します。坂ノ上薬師堂の諸像は2017年12月、静岡県指定有形文化財に指定されたばかり。中尊は等身大を超える12世紀の薬師如来像ですが、注目したいのはその周囲を取り巻く15体で、10世紀の像とされる静岡県内屈指の古像です。本展ではこのうち特に古様な姿を見せる如来像(写真⑤)をはじめ、十一面観音像と菩薩像、3体の天部像を展示します。天部像の一体は両手を正面で組む拱手の姿をしていますが(写真⑥)、この姿は神道の神像と共通する姿です。坂ノ上薬師堂にはもう一体、同様の姿の像がありますが、このことから坂ノ上薬師堂の群像が神仏習合の考え方に基づく本地仏(神の本体としての仏像)である可能性があります。先述の伊豆

の南禅寺群像にも神像が含まれていましたが、両者の共通点に神仏習合も指摘できそうです。

松野薬師堂の諸像も興味深い作例です。本尊は像高283cmの巨像で、古くから薬師如来として信仰されてきましたが、近年、弥陀定印を結ぶことから阿弥陀如来像と判断され、お堂の名称も薬師堂から阿弥陀堂に変更されました。とはいえ、現在の姿は後世の修理時の改変が考えられますし、このお堂には本尊と同じ大きさの像のものと考えられる如来頭部(写真⑦)が伝えられているので、こちらがかつて本尊であり、薬師如来だった可能性もあります。何よりこのお堂には薬師如来信仰の伝承とその痕跡が濃厚に残っており、古く薬師堂であったと考えて良いでしょう。ここには破損著しい姿ながら、平安時代の3体の菩薩像と1体の天部像が伝えられており、かつては薬師如来を主尊とした群像が存在していた可能性があります。本展ではそのうちの仏頭2点と、菩薩像、天部像を1点ずつ展示します(写真⑧、中央の2体)。静岡市、伊豆の知られざる歴史を秘めた仏像を是非ご覧ください。(田島)



写真⑤ 如来像 平安時代 静岡市・坂ノ上薬師堂 静岡県指定文化財



写真① 地藏菩薩像 平安時代 河津平安の仏像展示館 静岡県指定文化財



写真② 男神像 平安時代 河津平安の仏像展示館 静岡県指定文化財



写真③ 薬師如来像 平安時代 松崎町・指川区 松崎町指定文化財



写真④ 薬師如来像 平安時代 松崎町・松尾不動堂



写真⑥ 天部像 平安時代 静岡市・坂ノ上薬師堂 静岡県指定文化財



写真⑦ 如来頭部 平安時代 静岡市・松野阿弥陀堂 静岡市指定文化財



写真⑧ 菩薩像・天部像 平安時代 静岡市・松野阿弥陀堂 静岡市指定文化財



鍋木清方《築地川》より「明石町」 1941(昭和16)年 前期展示

本展では、当館コレクションに新たに加わった鍋木清方《築地川》を初公開いたします。1941(昭和16)年に描かれた《築地川》は、10図からなる連作を収めた画帖で、図の一点一点に清方の詞書が添えられています。この画帖には、清方が「心のふるさと」と呼んだ、明治20年頃の築地川界隈で暮らした思い出が綴られています。

築地川はかつて東京・築地を囲むように流れていた掘割の川で、そこには多くの人々が集い生活を営んでいました。外国人居留地があった「明石町」、夏は行人の憩いの場となった「伊達様の水門」、夕涼みに賑わう「亀井はし」、鯛売りが水揚げする「佃」など、水とともに生きる明治時代の人々の姿が作品から垣間見えます。これらは、少年時代に清方が親しんだ情景でした。

日本画家であると同時に優れた文筆家でもあった清方は、随筆集『築地川』

(1934年刊)で次のように述べています。

「鶺鴒色に萌えた楓の若葉に、ゆく春をおくる雨が注ぐ。あげ潮どきの川水に、その水滴は数かぎりない洞を描いて、消えては結び、結んでは消えゆるうたかたの、久しい昔の思い出が、色の褪せた版畫のやうに、築地川の流れをめぐつてあれこれと偲ばれる。」(鍋木清方 随筆集『築地川』より)

幼少の頃、清方の身近にあった築地



鍋木清方《築地川》より「亀井はし」 1941(昭和16)年 前期展示

川。その初夏の風景が美しく語られた文章からは、清方が築地川から離れて暮らしてもなお、この場所に深い愛着を持ち続けていたことがわかります。清方は折に触れ築地川の思い出を懐古しており、その追憶が絵となっている作品は少なくありません。そのなかでも画帖《築地川》は清方が肌で体感した記憶が色濃く表れている作品です。清方の思い出にあふれた画帖からは、在りし日の築地川流域の姿が目の前に広がるかのようです。

また、清方は紫陽花をこよなく愛した画家としても知られています。それは、別号として「紫陽花舎」を好んで使用していたほどでした。紫陽花に魅了されたのは、幼少の頃に「明石町」にあった異人館で咲く紫陽花や、築地一丁目の「紫陽花の垣」にはじまるといいます。多感な時期に魅せられた紫陽花の美しさは、終生画家の心を捉え続けました。

本展では画帖《築地川》を中心に、清方が描いた明治の下町に暮らす人々の生活をご紹介します。清方の愛した穏やかな懐かしい日々の情景、そしてそこで生きる魅力的な人々の姿をどうぞご覧ください。(土屋)



鍋木清方《築地川》より「築地橋」 1941(昭和16)年 後期展示

本年度の特別展『静岡の仏像+伊豆の仏像』では、初めて静岡市より貴重な仏像をご出品いただきます。

松野阿弥陀堂は静岡市の中心部から安倍川を遡ること約30分。河岸段丘に広がる茶畑の中にぽつとお堂が建っています。深い山々に囲まれ、緑と空がとても美しい場所です。ここは縄文土器も見つかった肥沃な土地で、古くから根菜類を多く栽培、戦国時代には周辺地域を結ぶ重要な場所でした。松野阿弥陀堂の仏像はかつて約200メートル離れた山頂に寺院があり、中世にこの地に移されたといわれます(静岡県教育委員会)。お堂の扉を開けると大きな平安時代後期の丈六仏(像高283cm)が坐し、その両脇には体のない美しいお顔が二つまつられています。その高さはおよそ1m、台座を入れると人の肩まであります。今回の展覧会では二つのお顔とともに、菩薩像2点をご出品いただきます。

松野阿弥陀堂はもともと「松野薬師堂」として信仰を集めてきました。中央の阿弥陀如来像の手(後補)には薬壺(時代不明)が乗せられ、三尊のいずれかが薬師如来として信仰されていたと思われまふ。そのほか、薬師如来は目を治す仏として信仰され、それを象徴する「穴あき石」がお堂の周囲に吊り

下げられています。堂内に奉納された寅の絵馬も寅年に御開帳されることが多い薬師信仰の痕跡です。いずれも地域の方々が大切に仏像を守ってきた歴史が形になってあらわれています。

坂ノ上薬師堂は市中心部から麓科川沿いを45分ほど遡った場所にあります。途中から山が迫る細い道になりますが、坂ノ上の辺りに着くと展望が開けます。お堂は高台にあり、その上には坂ノ上神社があります。調査で伺った際には野生のニホンカモシカが近くを歩いていた。この辺りにはかつて向陽寺という寺院があったそうですが(『駿河記』、現在はこのお堂のみ残っています。地域を眼下に見るお堂には、平安時代の仏像が16体並びます。本尊は12世紀の薬師如来像ですが、その他は10世紀頃の作と言われる古像です(詳細は、横田泰之「坂之上薬師堂所蔵について」『地方史静岡』第25号、1997年)。今回はこの中から如来像や十一面観音菩薩像、神像などをご出品いただきます。ここでも薬師如来は眼病封じの信仰があり、年齢の数だけ「め」の字を書いて奉納する習慣が残っています。

さて、伊豆で薬師信仰の拠点の一つとなったのが河津町の南禅寺(河津平安の仏像展示館)です。谷津の山あいにある南禅寺は平安時代前期の薬師如来を

はじめ26体の像があります。坂ノ上薬師堂の仏像群と共通するのは、その中に神像があることです。南禅寺の仏像群に関しては、当館主任学芸員・田島が昨年、論考「静岡県河津町・南禅寺の平安時代仏像群について—尊像構成から見たその性格—」(『鹿島美術研究年報』第37号、2020年)を発表、火山災害との関連性を指摘しました。本州から南方に突き出した伊豆半島と、山あいの大きな川沿いにある松野阿弥陀堂、坂ノ上薬師堂。それらの仏像が出あう本展では、薬師信仰に関する新たな世界が見えてくるかもしれません。

今回の旅を通じて、仏像が地域の方々によって大切に守られてきたようすを目の当たりにしました。いにしへの仏像を前にすると、平安時代から今なお仏像を守り継ぐ地域の皆様のご尽力に、心より畏敬の念が浮かびます。



山の中腹に建つ坂ノ上薬師堂



松野阿弥陀堂の堂内。本尊の両脇には丈六仏のお顔がまつられています



松野阿弥陀堂の周囲に吊り下げられた「穴あき石」



坂ノ上薬師堂の堂内



坂ノ上薬師堂に奉納された「め」の字



博物館実習① 8月9日～8月13日

今年度は初めて、県内にある静岡文化芸術大学と実習協力をし、また伊豆の地元出身学生の受け入れで、都留文科大学の学生とあわせて9名が実習に参加しました。実習では座学が多くなりがちですが、今年度は実物と向き合うことに重点を置き、より実践的な実習内容となりました。

初日は展覧会や、美術館の照明についてと、当館のリニューアルや建物のこだわり部分などをお話し、翌日から収蔵品を使って卷子、仏像の取り扱い、絵画作品、掛軸の取り扱いを行いました。実際に作品に触れることで、実習生には緊張感が伝わり、とても丁寧に取り扱いをすることが出来ました。なお、この実物に触れるということも、実習生が既にレプリカ等で取り扱いを学んできたこと、また学芸員から見て、実物を触る安定感があるかを判断しながら進めています。

また今回は、初めて館外での実習を行い、美術館近隣の太梅寺で、ご住職のご協力のもと、本堂内を見学させていただきました。安置されている仏像や、大般若経、華籠など、実際に使われている仏具も拝見させていただき、学芸員からは美術館や博物館以外にも多くの文化財があることを実習生にお話しました。

最終日は、当館の収蔵品を実際に用いて作る、展覧会立案を実習生全員で考えていただきました。展示の会場となった会議室では、パネルの組み立てから配置、角度の微調整まで、実習生同士が協力して行いました。完成した展覧会は、会議室を「家」に見立て、室内から季節の移ろいを感じさせる内容となり、仏像やマティス、ブラックや小倉遊亀などの作品が同じ空間に並ぶ展示は、実習生の瑞々しい感性で構成され、学芸員も新たな展示の可能性に気付くきっかけにもなりました。(櫻井)

博物館実習② 8月25日～8月29日

今年度は8月下旬に2回目の博物館実習を行いました。今回は地元出身の東京造形大学、東海大学の学生2名の受け入れとなり、5日間で美術館の展示空間や、作品の取り扱い等に取り組んでいただきました。以前、中学校での授業で当館へ来館したことや、デッサン・水彩画教室に参加していたことがある学生もあり、和気あいあいとした雰囲気での実習スタートとなりました。

また今回も収蔵品を実際に扱う機会を設け、さまざまな額に入った作品や、掛軸、仏像、卷子を使用して、作品ごとに取り扱う部分が違う注意点や、気を付ける場所など実感しながら、取り扱いをしていただきました。なお今回は近代館の中庭にある彫刻作品の清掃作業と、作品へのコーティングを実施し、作品の保存やメンテナンスも一緒に学びました。実習最終日は、当館の収蔵品を使って展示立案、展示作業を行い、油彩を中心とした展覧会が完成しました。(櫻井)



伊東高校城ヶ崎分校インターン研修 8月3日～8月5日

伊東高校城ヶ崎分校の学生3名の職場体験受け入れを行いました。3日間を通じて、主に学芸員の仕事を体験しました。開催中の展覧会を学芸員が説明し、展覧会の立案や美術館の役割をお話しました。また古写経や絵画などの作品を実際に触り、取り扱いや、作品の調書を作成することも行いました。今回は学芸員の仕事の一部分の体験でしたが、展覧会の工夫や、作品に対する考えなど、高校生からは3日間でさまざまな感想をいただきました。



出張ワークショップ「はじめての日本画」 8月2日

於：伊豆の国市野外活動センター「茅野っ子ひろば」伊豆の国市こども教室「あいキッズ」

伊豆の国市主催の出張ワークショップ「はじめての日本画」を開催しました。今年は小学校1年生から中学校1年生までの12名の参加があり、当館の学芸員が講師となって、小さな色紙に岩絵の具を使って日本画を描く体験を行いました。2012年から行っている出張ワークショップですが、参加した子供たちからは、難しかったけれど楽しかった、硬い石や貝から絵具ができてびっくりした、色々な絵具を混ぜて色を作るのが面白かったなどの感想が聞かれました。



調査

伊豆の国市内寺院 1ヶ寺 7月7日 / 静岡市葵区内堂宇 2堂 7月16日

伊豆の国市の真珠院の調査では、ご住職のご協力のもと、安置されている仏像や、涅槃図の調査を行いました。また調査には、かなみ仏の里美術館のボランティアの方も見学をし、寺院の歴史も一緒に学びました。

葵区の松野阿弥陀堂、坂ノ上薬師堂では、お堂を管理されている方々にご配慮くださり、仏像や堂内の様子など実見させていただきました。



## 伊豆だより



実習生の立案した展示より  
夏の庭にマティスの絵が合う空間になりました

今年の夏は大雨が多く、伊豆各所でも大きな被害が出ました。美術館周辺は幸いにも被害はありませんでしたが、被害に遭われた皆様には心よりお見舞い申し上げます。

8月には静岡県も緊急事態宣言が発令され、下田の勇壮な太鼓祭りも、海水浴場も急遽お休みになりました。昨年に続き、静かな夏休み時期となってしまう、駅周辺も少し寂しい雰囲気が伝わってきます。一方、美術館の8月は高校生の職場体験や、学芸員を目指す学生さんたちの実習受け入れなど、実はいつもの8月よりも賑やかでした。真剣な表情で実習や体験に取り組む学生さんたちを見て、初心を思い出しながら、10月から開催の特別展「静岡の仏像+伊豆の仏像」、「鏑木清方《築地川》の世界」準備に取り組んでいきたいと思えます。

(櫻井)

## 出品予定の展覧会



### 府中市美術館 開館20周年記念

#### 動物の絵 日本とヨーロッパ ふしぎ・かわいい・へそまがり

2021年9月18日(土)～11月28日(日) 府中市美術館、東京

「美術における東と西」を活動の柱の一つとする府中市美術館。開館20周年記念展となる本展では、日本と西洋のさまざまな動物の絵が勢ぞろいします。「ふしぎ」な別世界を描く《春日鹿曼陀羅図》(重要文化財、奈良国立博物館蔵)や伊藤若冲《象と鯨図屏風》(MIHO MUSEUM蔵)、とにかく「かわいい」尾形光琳《竹虎図》(京都国立博物館蔵)や俵屋宗達《狗子図》、「へそまがり」な感性から生まれたポール・ゴッガン《微笑》(ランス美術館蔵)や徳川家光《兎図》など、見所満載です。当館からはアルブレヒト・デューラー《アダムとエヴァ》を出品します。アダムとエヴァの周りに隠れた動物たちが、日本と西洋の仲間たちと共演します。

なお、本展は2020年9月に開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により1年延期しての開催となりました。一年越しで開催される本展をぜひお楽しみください。

(土森)

次回休館日は2021年9月27日(月)～10月8日(金)です(展示替えのため)

 **上原美術館**  
Uehara Museum of Art

開館時間  
9:30～16:30  
最終入館は16:00まで

休館日  
展覧会会期中は無休  
展示替え日のみ休館

入館料  
大人/1,000円、学生/500円  
高校生以下無料 \*団体10名以上は10%割引

表紙写真：博物館実習のようす。最終日には実習生が立案した展覧会が完成しました。(詳細は6ページ)